



SDGsの 視点で見る 大学の学び



低学年次から少人数で学び、 主体的に考える力を鍛える

関西大学社会学部社会システムデザイン専攻は、社会の問題を見いだし、その解決策を「デザイン」できる人材の育成を目指している。同専攻4年の森岡駿太さんは、入学の動機を次のように話す。

私たちが紹介します



社会学部社会システム
デザイン専攻4年
北島沙耶
きたじま さや
兵庫県立北摂三田高校卒業



社会学部社会システム
デザイン専攻4年
森岡駿太
もりおか しゅんた
兵庫県立篠山鳳鳴高校卒業

地域共生社会をデザインする力を 磨くため、仲間や社会と協働し、 問題解決に取り組む

関西大学社会学部 社会システムデザイン専攻
草郷孝好研究室

「私の地元では過疎化が進んでおり、小学生の時、通っていた小学校が近隣の2校と統合しました。また、就職や進学を機に、地元を離れる人も多くいました。そのような経験から、大学では過疎問題を解決する研究がしたいと考え、本専攻を志望しました」

同学部の特徴は、低学年次からゼミ形式の少人数クラスが設置され、学生が、主体的・協働的な学びを進めることだ。

1年次の「基礎研究」は、専門教育科目の基礎を学びながら、レポート作成などの学びの土台を身につける。

2年次の「基礎演習」は、各クラス、15人程度で、発表やディスカッションのスキルを鍛える。同専攻の4年の北島沙耶さんは、草郷孝好教授のクラスで学んだ。貧困や多文化共生などに関する文献資料を読み、学生同士でディ

スカッションを行った。

「貨幣が価値を持たない外国の暮らしの映像を見て、貨幣経済の社会は、よいか否かについて議論しました。草郷教授は、学生の意見に対して問いを投げかけてくださいます。最初はその数が多く戸惑いましたが、自分の意見が整理されていないと気づき、論理的な発言を心がけるようになりました」

共生社会の実践を学びながら、 ゼミ生全員で報告書を作成

3年次から研究室に所属し、「専門演習」で研究を深めていく。2人は、学生同士の対話が重視される研究室で、関心のある地域研究をしたいと考え、ともに草郷研究室に所属。同研究室では、草郷教授が専門とする開発学をベースに、「目標1 貧困をなくそ

う」を始め、SDGsが目指す共生社会を実現するための研究を行っている。

3年次前期は、飢餓や貧困、社会システムに関する文献を読み、レポートを作成。また、共生する地域づくりの実践事例を知るため、2020年度の実践事例を知るため、2020年度の3年生は、同大学の卒業生で、兵庫県丹波市佐治地区で空き家の活用を行う先輩に、オンラインで取材した。

3年次後期は、「2050年のあるべき未来社会を構想し、鍵となるのは何か」というテーマをゼミ生6人で考え、1つの報告書にまとめた(図)。

北島さんたちは、『環境』『多様性と自由』『生活保障と福祉』の3つが大事だと考えた。

「まず、望ましい社会とはどのような社会なのかをゼミ生それぞれが考え、意見交換をし、理想の社会に必要な要素を8つ出しました。その8つの

目標の解説は
WebでCheck!



または、
HOME > 教育情報 > 高校向け >
コーナー別 記事一覧からお読み
いただけます。

<https://berd.benesse.jp>

**2050年の理想の社会
実現のための3つの柱**



20年度はコロナ禍の影響で、同ゼミ4年生の卒業発表会において、報告書の中間発表をしたが、例年は、市民向けのワークショップの場で発表している。



写真 コロナ禍のため、訪問による実施はできていないが、学外訪問をして、実際に問題解決に取り組んでいる人から、実践について学ぶ機会も多い。

優先順位を考え、さらに重要度の高さから、3つに絞りました」(北島さん)
研究はゼミ生全員で分担して進め、その中で協働の難しさも感じたという。

「最初は、情報共有が不十分で作業の進捗に差がつかっていました。ため、こまめに打ち合わせをして進捗を確認しながら進めるようにしました」(森岡さん)

「環境」を担当した森岡さんは、「ゴミ問題」に焦点をあてた。文献調査に加えて、「ゴミ分別の先進的な取り組みをしている徳島県上勝町の担当者」にメールを送り、取り組みが成功しているポイントをヒアリングした。

「上勝町は、「ゴミを45種類に分別し、80%と高いリサイクル率を誇ります。分別をどのように住民に理解しても

らったのかを尋ねると、何度も説明会を開催し、住民と継続して対話を行ったということでした」(森岡さん)

北島さんは、「環境」の中でも森林問題について調べた。海外の森林伐採を減らすためには、国産木材を活用する循環をつくる必要性に気づき、プラスチック製品を木製製品に替える取り組みを行うNPO法人を取材した。

「コロナ禍のためメールでの調査でしたが、文献などの二次情報では分らなかった、新しい価値観を生み出す大変さなど、生の声を得ることができました」(北島さん)

ゼミ生の調査結果をまとめていくと、複数の調査で『脱炭素』がキーワードとして上がるなど、問題が相互に影響し合っていることが分かった。

「報告書では、社会問題が相互に関連していることを市民に周知し、一人ひとりが問題を自分事として捉え、行動することが大切だと結論づけました」(北島さん)

ゼミでの学びを地域社会における問題解決に役立てる

4年次には、各自卒業研究に取り組む。北島さんは、ゼミの学びの中で過疎地域の増加や地域間格差に関心を持ち、地域資源を地方創生に活用することの意義を研究している。

森岡さんの卒業研究のテーマは、空き家の活用による地域活性化だ。

「兵庫県の丹波篠山市丸山集落では、空き家を宿泊施設に改築し、地域活性化につなげています。先駆者の実践事例を学び、他の地区でも活用できる地域活性化の仕組みを研究しています」

森岡さんは、ゼミでの学びをアピールし、信用金庫に就職予定だ。

「地域に密着したコンサルティングを行い、地域発展に貢献したいです」北島さんは、学校や病院のシステムを扱うIT企業から内定をもらった。「システム面のサポートを通して、人々の暮らしや生活を支える存在になりたいと思っています」

学びとSDGs

問題を構造化し、市民目線で社会変革できる人に



関西大学
社会学部教授
草郷孝好
くさこう・たかよし

ゼミでは、学生が、自身が学びの主体であることを自覚できるよう、自分の考えを発信する場を多く設けています。3年次後半にゼミ生全員で行うレポート作成では、役割分担をして進めるといった段取り力を身につけることもねらいとしています。また、実践の場で学びを深められるように、地域共生活動の現場を視察したり(写真)、学生が企画・運営するワークショップを開催したりしています。

4年次の卒業研究の指導では、問題の構造化を意識させています。学生に、どんな小さな問題も大きな問題と関連があるという視点を持たせるため、自分の研究テーマがどのような社会課題と関連があるのか、構造図を描かせ、それを研究計画や文献探しに役立ててもらっています。そのようにして、ウェルビーイングを大切に社会を目指す、社会変革をデザインできる人を育成していきたいと考えています。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

学年回

担任